



# 春夏秋冬 台湾徒然

第34回

## バリ島に眠る日本兵

柳本通彦

昨年末に台湾沖でかなり大きな地震が発生した。幸い、被害は最小限のものであったが、アジア諸国間の通信が麻痺するという意外な影響が残った。原因は台湾を経由していた海底ケーブルが損壊したためだった。実は台湾本島は、東アジアと東南アジアを結ぶ通信システムのハブ的機能を果たしているのである。

台湾のそうした役割は明治28年に決定付けられたともいえる。下関条約で清国から台湾を割譲された日本は、ただちに日本と台湾の間に海底ケーブルを敷設したり（石垣島経由）、民間航路をひらいたりして、両地を太い動脈で結ぶとともに、大量の人材と文明の利器を植民地に持ち込んだ。そして台湾を拠点に南方への進出を図っていく。まさに大東亜共栄圏の夢は台湾という

島を枕に育まれていったといつてよい。当時、台湾経由で南洋に行ったという人物は少なくない。さらに台湾から出征して行った日本人も実に大勢おられることに驚かされる。さらに最近、台湾から出征した元日本兵が、台湾にも日本にも帰らず、まだインドネシアに複数生存しておられるときいて、二度びつくり……。

彼らはインドネシア残留元日本兵と呼ばれる一群の人たちに属するのであるが、どうして祖国にも、家族の元にも帰ろうとされなかったのか。そうした疑問を胸に抱きつつ、そのお一人を、バリ島にお尋ねする機会を得た。目当ての人物、平良定三（たいら じょうざ）さんは、ニヨマン・ブレレンという現地名で妻子とともに暮らしておられるという。1920年に沖縄県宮古島で出生し、



平良さんの遺影を持つ四男と夫人

15歳で台湾に渡ったと聞かされていた。デンパサール市内の住宅街で探し当てたご自宅から出てきた男性は、四男だと名乗り、私が日本人だと知ると、目を伏せて、申し訳なさそうに肩を落としました。残念ながらご本人はすでに亡くなられていたのだから。ご命日は、2004年6月5日。享年84歳だった。奥さん（78歳）にお頼みして、思い出話をうかがう。平良さんは、インドネシア独立戦争に参加するために敗戦後、部隊を離脱して自らバリ島に残ったという。ご夫婦はともにオランダ軍と戦った戦友同士なのである。

葬儀のときの写真を見せてもらった。路地裏にびつしりと軍服姿が並んでいる。国軍葬だったという。バリには少なくとも10名以上の残留元日本兵がいた。しかし、オランダとの戦争が終結した時点で生存者は平

良さんだけになった。すべての戦友を失ったことは痛恨の極みであつたらう。二度にわたる彼の戦争は終わった。インドネシアは独立した。しかし、平良さんは帰らなかった。大使館の要請にも応じなかった。自ら「日本人の墓守」と称し、戦友たちを弔うことを使命として「戦後」を過ごされてきた。

確かに開戦の名目に「アジアの解放」が掲げられてはいた。南進基地台湾から出征された平良さんは、その目的を完遂するために、バリに残られたのであるのか。それとも、祖国の敗戦に絶望し、やむなく帰国を断念されたのであるのか。バリのインドネシア独立軍は最終的にオランダ軍に包囲されて壊滅する。その御霊はバリ島中部マルガの戦場跡に祀られている。1300以上、整然と並んだ墓碑のなかに、日本人とわかるものが少なくとも12基あるという。無言の彼らは我々に何を問いかけているのだろうか。

やなぎもと・みちひ  
京都市生まれ。99年度「潮賞」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たちの聖戦」（現代書館）「台湾革命」（集英社新書）「明治の冒険科学者たち」（新潮新書）など。最新刊に「ノンフィクションの現場を歩く 台湾原住民族と日本」（かわさき市民アカデミー出版部）